

神聖の剣と魔法の領巾^{ひ れ}

一言語学と歴史学の接点一

アレキサンダー・ヴォヴィン

ハワイ大学マノア本校

国際日本文化研究センター

はじめに

この論文では⁽¹⁾、上代日本文献に見られる三つの言葉の語源を明らかにするつもりである。いずれも、朝鮮半島との交流に関連があると思う。一つ目の言葉は、天皇族の三宝の一つであった草那藝之^{くさなぎの}大刀の倶娑那伎^{くさなぎ}である。二つ目は、日本書紀歌謡 103 に現れる「さひ₁」という太刀である。そして三つ目は、平安時代以前貴族の女性が着ていた領巾^{ひ れ}である。

1. 草那藝之^{くさなぎの}大刀はなぜ「倶娑那伎^{くさなぎ}」と呼ばれているのだろうか。

先ず、上代日本文献に出る「倶娑那伎^{くさなぎ}」の話を見てみよう。

故切其中尾時。御刀之刃毀。爾思怪。以御刀之前刺割而見者。在都牟刈之^{つむかりの}大刀。故取此大刀。思異物而。白上於天照大御神也。是者草那藝之^{くさなぎの}大刀也【那藝二字以音】（記上：23 ウ・8）⁽²⁾

其の中の尾を斬りし時に、御刀の刃^か毀けき。爾に怪しと思ほして、御刀の先に刺し割きて見たまへば、都牟刈之^{つむかりの}大刀ありき。故、此の大刀を取りて、異しき物と思ほして、天照大御神に上げたまひき。是は草那藝之^{くさなぎの}大刀なり（那藝の二字は音を以るよ）

至尾劍刃少缺。故割裂其尾視之中有一劍。此所謂草薙劍也。^{くさなぎの}草薙劍^{くさなぎ}、此云倶娑那伎能都留伎。一書云、本名天叢雲劍。^{むらくもの}蓋大蛇所居之上、常有雲氣。故以名歟。至日本武皇子改名曰草那藝。素戔鳴尊曰是神劍也。吾何敢私以安乎。乃上献於天神也（紀神代上：41）⁽³⁾

其の尾に至りて斬りし時に、劍の刃^か少し缺けたり。故、其の尾を斬り裂きて、これを視たまふに、一劍有りき。これ所謂^{くさなぎの}草薙劍^{くさなぎ}なり。草薙劍、此れを倶娑那伎能都留伎^{むらくもの}といふ。一書云、本名は天叢雲劍なり。^{けだし}蓋、大蛇居所上於て常雲氣有り。^{いきさし}故、之に名を付く。日本武皇子に至

りて、「草那藝」として名を改めたり。素戔嗚尊曰く、「是れ、神劍なり。吾何に敢て私にをけらむや」とのたまひて、天の神にに奉り給ふ。

斬其尾劍刃歛。故割裂其尾而視之中有一劍。名天叢雲劍。^{むらくもの}蓋於大蛇所居之上常雲氣故名焉。素戔烏尊曰是神兵劍也。吾何敢私以安乎。乃共大々刀思曰遣五々世孫天之葺根神上奉於天。其後日本武尊征東之時以其劍號曰草薙劍矣（先代4：85）^{くさなぎのつるぎ}（4）其の尾を斬りし時に、劍の刃歛けたり。故、其の尾を斬り裂きて、これを視たまふに、一劍有りき。名は、天の叢雲劍といふ。^{けだし}蓋、大蛇居所上於て常雲氣有り。故、之に名を付く。素戔烏尊曰く、「是神兵劍なり。吾何に敢て私にをけらむや」とのたまひて、すなはち共に大々刀を取りて思ひて、五々世孫天の葺根神を遣はして、天に奉り給ふ。其の後、日本武尊東を征ちたまふ時に、其の劍を草薙劍と名づけたまひたり。^{やまとたけるのみことあづま} ^う

『古事記』には予想される通り省略された話しか出てこないが、『日本書紀』と『先代旧事本紀』の話は大部分が一致する。此の話によって、この劍の元来の名前は「叢雲」であつたけれども、日本武尊の東の征服の時に「草薙」という名前に変わった。では、日本武尊の東の征服の時のその劍にかかわる話を見てみよう。

爾其國造火著其野。故知見欺而。解開其姨倭比賣命之所給囊口而見者。火打有其裏。於是先以其御刀薊撥草。以其火打而打出火。著向火而燒退（記中：41 オ・6ーウ・1）

爾に其の國の造、火を其の野に著けき。故、欺かえぬと知しらして、其の姨倭比賣の命の給ひし囊の口を解き開けて見たまへば、火打其の裏に有りき。是に先づ其の御刀以ちて草を薊り撥ひ、其の火打以ちて火を打ち出でて、向火を著けて燒き退けて。

放火燒其野。王知被欺。則以燧出火之。向燒而得免。【一云、王所佩劍葉雲抽之、薙攘王之傍草。因是、得免。故號其劍曰草薙也。葉雲、此云「茂羅玖毛」】（紀7：215）

其の野に放火燒。王、欺かれぬと知ろしめして、則ち燧以ちて火を出して、向燒けて免るること得たまふ。（一云、王の佩せる劍、葉雲、抽けて、王の傍の草を薙ぎ攘ふ。是に因りて、免るること得たまふ。故、其の劍を號づけて草薙と曰ふ也。葉雲、此を「茂羅玖毛」といふ）^{むかひびをつ} ^{はら}

『日本書紀』の2番目の話によると、日本武尊がこの劍で草を刈った事から、この劍を「草薙」と名づけた。この伝統的な語源は国語学の定説になったが、この説

には矛盾する所が多くあると思う。

先ず、この剣の元来の名前である「叢雲」(または「藁雲」)は、『日本書紀』における初めての音韻表記では「茂羅玖毛」として出ている。時代別国語大辞典によると、『日本書紀』の中の「茂」という字は/mo/とも/mu/とも読めるが⁽⁵⁾、『日本書紀』以外の音韻表記の「茂」はいつも/mo/であるし、『日本書紀』にもその言葉以外の/mu/としての使用の例が全くない⁽⁶⁾。だから、「茂羅玖毛」は/murakumô/ではなく、/morakumô/であるので、「叢雲」として説明するのは難しいと言える。「叢雲」の名前については、多分民間語源に過ぎないと思われるが、細かい討論はこの短い論文ではできないので、遠慮しておく。

そして、『古事記』は『日本書紀』と比べると、省略された作品であるから、『日本書紀』が紹介する一つの事件に関わる二つの異なる物語が『古事記』で一つに合わせられたことは驚くべき事ではないと思う。とすると、倭武が危険を逃れる物語は基本的に二つの異なる話と言ってもよいだろう。一つの話では、倭武は迎え火を使って、命が助かった。もう一つの話では、剣で草を刈った事で、命が助かった。しかし、この2番目の話は信じがたいと思う。

①先ず、剣は草刈道具としては使いづらい。

②草を刈っても、迎え火無しでは、命は助からない。

そして、『記紀』と『先代旧事本紀』に出ている「草薙」と「草那藝」は実際「草を薙ぐ」に関係がなく、その剣の名前の本当の意味が忘れられてしまった後の民間語源の試みに過ぎない。この民間語源を考慮に入れなければ、その剣の名前の本当の意味を理解するためのさまざまな文献的、歴史的、そして言語学的な手がかりがあると思う。

- (1) 先ず、この剣は「異物」(記)、「神剣」(紀)、「神兵剣」(先代)と呼ばれている。これは、明らかに「不思議な剣」という意味ではなく、「神聖な剣」という意味である。大蛇の尻尾から出ている剣は「神聖な剣」と呼ばれても間違いないだろう。
- (2) 『日本書紀』に記録された物語の一種によると、素戔鳴尊は新羅から出雲の国に來られた事になっている(紀神代上: 44-45)。
- (3) 「俱娑那伎」の語源は「草薙」であるという説を採用せず、「神聖な剣」とすると、日本語では *kusanaⁿgî* (俱娑那伎) という言葉を「神聖な剣」として説明する事はできない。

上の三つの手がかりを考え合わせると、*kusanaⁿgî* という言葉はやはり新羅語の語源を持っているのではないかと思うようになる。

中世朝鮮語には・𑖦 /kús/「シャマニズム儀式、魔法」という言葉がある。朝鮮祖

語には名詞の語幹の典型的な構造であった*CVCV という構造が中世朝鮮語には省略され、いつも CVC または CCV になる。そして、中世朝鮮語の・𐏃 /kús/「シャマニズム儀式、魔法」は祖形が*kusV であった事を簡単に再構できる。2 番目の音節の母音は*a であった可能性は、朝鮮語の内的再構での証拠がないが、否定もできない。今の所、これは人間の知識の限界である。

そして、中世朝鮮語には nárh「刃」という言葉がある。先に言及した朝鮮祖語*CVCV という構造のように、朝鮮祖語*CVCCV の構造は中世朝鮮語では省略されて、いつも CVCC または CCCV になる。また、中世朝鮮語の/h/は朝鮮祖語*k に遡る。従って、中世朝鮮語の nárh「刃」は祖形が*narkV であったのを簡単に再構できる。上代日本語以前には*rk という子音群が不可能であったので、外国語の/rk/は*nk として借用され、その*nk は上代日本語の時代にはもう¹g/に変わってしまった。

中世朝鮮語には*kús- nárh「魔法の剣、神聖な剣」という表現は現れないが、忘れていけないのは、中世朝鮮語の文献は 15 世紀の物が多く、その時期は飛鳥と奈良時代とは大分離れているし、李朝の国立儒教思想の影響で仏教も、言うまでもなく、シャマニズム教も、非常に圧迫されていた。

従って、上代日本語の *kusana¹gî* (倶娑那伎) が古代朝鮮語の*kusa-narki「魔法の刃、神聖な刃」に由来する可能性は非常に高いと思う。

2. 差比/sapî/は一体どんな物だったのだろうか。

差比という言葉は蘇我を誉める推古天皇の御歌に出ている。音仮名で書いた例はそれ以外にない。

摩蘇餓豫 蘇餓能古羅破 宇摩奈羅麼 譬武伽能古摩 多智奈羅麼 勾礼能摩

差比 宇倍之訶茂 蘇餓能古羅烏 於朋枳彌能 菟伽破須羅志枳 (紀歌謠 103)

まそ₁がよ₂ そ₁がの₂こ₁らは うまならば ひ₁むかの₂こ₁ま たちならば
くれの₂まさひ₁ うべ₂しかも そ₁がの₂こ₁らを おほき₁み₁の₂ つかはす
らしき₁

眞蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば 日向の駒 太刀ならば くれの眞さひ₁
うべしかも 蘇我の子らを 大君の 使はすらしき

この歌の「馬ならば 日向の駒 太刀ならば くれの眞さひ₁」という文脈を見れば、馬～駒、太刀～眞さひ₁の平行性によって、眞さひは駒が馬の種類であるように、太刀の種類でないといけない。「眞」は接頭語であるので、「さひ₁」は明らかに語幹である。問題なのは、「さひ₁」はどんな太刀であったかという事である。

先ず、この歌に出ている「くれの眞さひ₁」は「くれ」というところからも分かるように、確かに輸入された太刀の種類であった。「くれ」は通常中国の呉の地域または中国の全国を指していると信じられているが⁽⁷⁾、馬渕和夫先生が指摘なさったように、「くれ」は元来中国の呉（中世中国語*ŋɔ）には音韻的にも歴史的にも関係がなく、実際朝鮮半島の北と満州の南を支配した「句麗」/kurye/（または高句麗⁽⁸⁾、上代日本語 *kôma*）を指している⁽⁹⁾。「くれの眞さひ₁」が句麗の眞さひ₁だとすれば、「さひ₁」が高句麗の言葉であると考えるのは当然である。しかし、残念ながら、『三国史記』などに残っている高句麗語の資料の中にこの言葉は保存されていない。とは言え、言語学的な立場から見ると、「さひ₁」が元来純粋な日本語の言葉だとすると、その日琉諸言語中の分布状況は普通とは言えない。「さひ₁」は上代東日本語にも中古日本語にも琉球語にも出ておらず、上代中央日本語にしか現れない。この事は、「さひ₁」が借用語である可能性が非常に高い事を示している。「さひ₁」が借用語と考え、その語源と正確な形を見極めるためには、日本語の周辺にある言語を見なければならない。そうする前には、上代日本に存在した剣の種類と名前について簡単に言及したいと思う。

上代日本には剣の基本的な種類が二つあった。1種は *туруⁿgî*（劍，都留伎，都流藝）で、もう1種は *katana*（刀，小刀，加太奈）だった。*туруⁿgî* は両刃のまっすぐな剣で、*katana* は片刃の曲がっている剣である。時々 *katana* は短剣と小刀の両方を指している。*katana* は後期古代朝鮮語の借用語で、語源は明らかである。そして *katana* は古代朝鮮語の *xatɒŋ ~ *xatɒn（一等，河屯）「一」と *narh「刃」の合成語である⁽¹⁰⁾。*туруⁿgî* の語源は明らかではない。日本書紀歌謡 103 に出てくる *tati*（大刀，平安時代以後「太刀」）は基本的に長剣であった。平安時代以前の *tati* はすべて *туруⁿgî* の種類であった。*tati* にも2種あり、1種は頭椎大刀（上の挿絵）で、もう1種は環頭大刀（下の挿絵）である（図1）。環頭大刀は「こまつぎ」（高麗劍，狛劍）とも言われている。

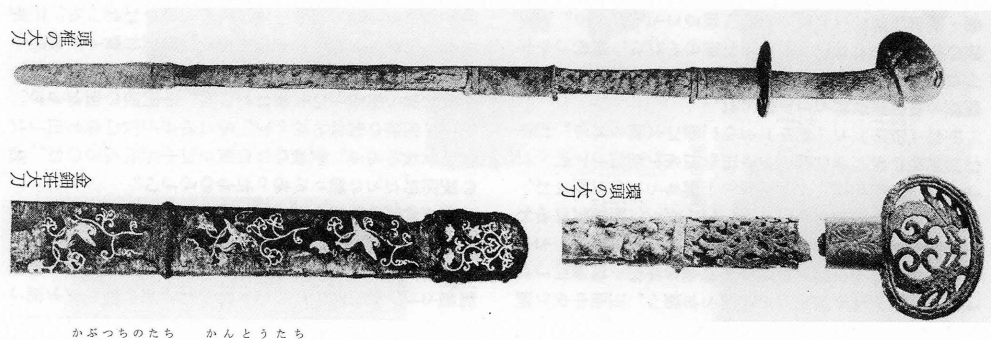


図1 頭椎大刀と環頭大刀（室伏信助等 1979『有職故実日本の古典』東京：角川書店より）

上代日本語「さひ₁」(差比)は通常二つの意味を持っていると言われている。一つは太刀の種類で、もう一つは鋤である⁽¹¹⁾。『時代別国語大辞典』(上代編)に指摘されているように、「太刀」と「鋤」に関連があったかどうか分からないが、少なくとも、両方が上代日本語では同音語だったのは明らかである。次の日本書紀の文章を見ると、この事は明白である。

素戔鳴尊乃以蛇^{からさひ}韓鋤之劍斬頭斬腹

素戔鳴の尊は蛇の韓鋤の劍で「八俣大蛇」の頭と腹を切った(紀神代上:44)

韓鋤之劍「韓国の劍」はここで「さひ₁」の訓仮名として使った「鋤」^{さひ}を含めている。

現代朝鮮語には *삽* /sap/「鋤」という言葉があり、これはおそらく中世朝鮮語の・*삽* /sárp/「鋤」の短縮であると思われるが、中世中国語の鋤 *sap「鋤」の借用語である可能性も完全に否定できない。上代日本語の「太刀」と「鋤」とに関連があるとすると、現代朝鮮語 *삽* /sap/「鋤」と中世朝鮮語・*삽* /sárp/「鋤」には「太刀」という意味が現れていない。この意味欠落を無視するとしても言語学的問題が残る。もし高句麗語の原形が*sarpiだったとすると、それは上代日本語には「さひ₁」としてでなく、「さび₁」(*sarpi>*sanpi>sa^mbi)として借用されると考えるのが普通であると思われる。上に示したように、上代朝鮮語の*nārkiは上代日本語に「なぎ₁」(*nārGi>*naŋGi>na^ŋgi)として入った。つまり、外国語の*rCVの連続は上代日本語には/*C_[+voice]V/として借用されていたのである。そして、一見して、上代日本語の「さひ₁」と中世朝鮮語の・*삽* /sárp/「鋤」との直接の関連は信憑性が低いようであるが、次にもう一度この問題を詳しく見ていきたいと思う。

中国語「鋤」/sà/ (中世中国語 *sap*) は西漢時代の書籍である『急就篇』の武器のリストに見えるが、正確な意味は説明されていない。顔師古(581-645 紀元後)の『急就篇』の注釈には中世中国語の鋤 /sap/は「短い槍」として説明されている。中世中国語の鋤 /sap/は『晋書』(5世紀後期)にも「戟」^{ほこ}として説明されている。また、同じ中世中国語の鋤 /sap/は晋朝の陸雲の書籍である『答車茂安書』にはなんと農具の名前として初めて記録されている⁽¹²⁾。

それでは、「太刀」、「鋤」、「短い槍」と「戟」の共通点は何だろうか。この道具のいずれも刃を持っている。上代日本語の「さひ₁」の語源の第一の可能性として、中世中国語の鋤 /sap/に由来して、高句麗語を経由して上代日本語に入ったということである。しかし、この語源には問題がないとはいえない。先ず、中世中国語には

「太刀」という意味は全然現れていないのである。それから、上代日本語の「さひ₁」が中世中国語に由来したとすると、第2の音節の/i/は説明しづらくなる。上代日本語には勿論音節末に子音はなく、音節末の子音がある言葉を借用する時に反響母音を加える傾向があったのは間違いないのであるが、中世中国語の鋌 /sap/の場合、この反響母音は/i/ではなく、/u/である。/i/がありえないとは言えないが、/u/の方がより自然だと思う。

もう一つの可能性を考えておこう。ヨーロッパ諸言語には上代日本語の *katana* に非常に似ている武器がある。例えば、英語 *sabre*、フランス語 *sabre* (中世フランス語 *sable*)、ドイツ語 *Säbel* (ドイツ語方言 *Sabel*)、ポーランド語 *szabla*、ロシア語 *сабля*、ハンガリー語 *szablya*、オランダ語 *sable*、等である。ヨーロッパ人が最初にこの武器を見たのは9世紀のハンガリー族の侵入の時、または6世紀のアワル族の侵入の時であった。いずれにしても、片刃で曲がっている剣のようなヨーロッパの *sabre* の由来はアジアに遡る。ヨーロッパ諸言語にある *sabre* などの語源を細かく研究なさった Stachowski 先生の御意見では、この言葉はツングース語の *seleme* 「刀」に遡る⁽¹³⁾。ツングース語の *seleme* 「刀」の語源は (<*sele 「鉄」+ -me 派生名詞接尾語) 明らかであるが、ヨーロッパ諸言語には l-m の連続の代わりに b-l または b-r の連続が出るのは大問題である。もし高句麗語の原形が *sable または *sabre であったとすれば、上代日本語の「さひ₁」もヨーロッパ諸言語の *sable*~*sabre* も非常に説明しやすくなる。上代日本語以前語 (pre-Old Japanese) の *e は上代日本語の /i/ に繰り上げられ、上代日本語には /p/ と /^hb/ しかなかったので、外国語の /b/ は /p/ として借用されたのは当然である。勿論、高句麗語の *sable または *sabre が直接ヨーロッパ諸言語に入るのは不可能であるが、おそらくいずれかの中央アジアの言語を経由して借用されたと考えられる。

そして、中世朝鮮語の・𑖦 /sárp/ 「鋤」にもう一度戻ろう。上に引用した紀神代上: 44 の「韓鋤之劍」^{からさひ}を見れば、古代朝鮮語にも中世朝鮮語の・𑖦 /sárp/ の原形の意味は「鋤」だけではなく、「劍」であるかもしれない。中世朝鮮語にも現代朝鮮語にも /pr/ という子音群はないので、古代朝鮮語の *pr の子音連続が音位転換で中世朝鮮語の /rp/ に変わった可能性は高いと思う。そして、「劍」という意味が中世朝鮮語に至るまで完全に消えてしまったと考える事も可能である。

私の仮説は、上代日本語の「さひ₁」[sapî] が実際に劍ではなく、刀^{かたな}であるし、高句麗語の *sabre または *sable に遡る。

私の仮説が正しければ、ユーラシアの騎馬戦争の状態を大改革した鎧だけでなく、刀^{かたな}も高句麗で発明されたことになる。

3. 領巾（比礼，比例，比列，必例，必礼，礼巾）/pîre/「魔法のスカーフ」の由来

平安時代以前の貴族の女性が着ていた衣服の大切な部分であった領巾は超自然な能力を持っていたと信じられていた。王維坤先生が指摘されたように、物体としての領巾の由来は中国の貴族の女性が着ていた衣服の大切な部分であった「披帛」に遡るかもしれない。しかし、「披帛」が超自然な能力を持っていたという信仰はあったかどうか分らない。図2は唐時代の永泰公主墓（706 AD）の壁画に「披帛」を着ている貴族の女性を描いている。

図3は平安時代の女性の姿を描いているが、これを見ると、領巾は長い布で背中から肩関節の下をふんわりと覆うように身に付けられているのが分かる。



図2 唐永泰公主墓壁画の
貴族女性の「披帛」
(インターネット)

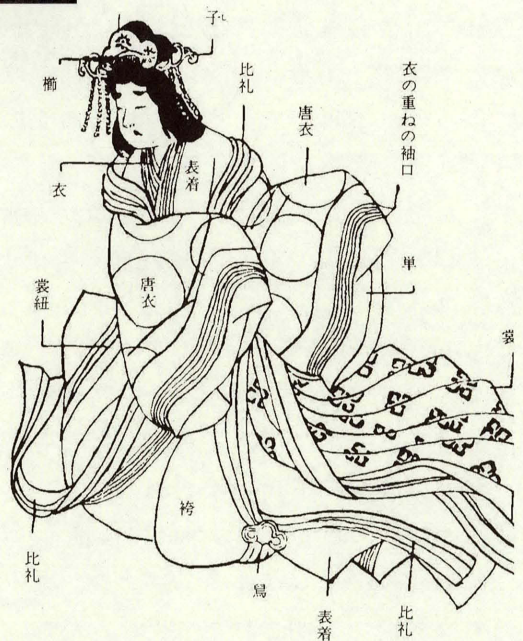


図3 貴族女性の領巾
(室伏信助ほか編 1979
『有職故実日本の古典』
東京：角川書店より)

前項の「さひ₁」に比べると、

釵子・比礼『年中行事絵巻』より

領巾は上代日本文献に頻繁に現れるし、その意味も明らかでどんな謎もない。たとえば、『万葉集』に出てくる、次の二つの例を紹介しよう。

麻都良我多 佐欲比賣能故何 比列布利斯 夜麻能名乃尾夜 伎々都々遠良武
(万5. 868) ⁽¹⁴⁾

まつらがた さよ₂ひ₁め₁の₂こ₁が ひ₁れふりし やまの₂なの₂み₂や
き₁き₁つつをらむ

松浦縣 佐用姫の児が 領巾振りし 山の名のみや 聞きつつ居らむ
山上臣憶良著、731年。

大伴佐提比古郎子特被朝命奉使藩國。艤棹言歸稍赴蒼波。妾也松浦〔佐用嬪面〕
嗟此別易歎彼會難即登高山之嶺遙望離去之船悵然断肝黯然銷魂遂脱領巾麾之。傍
者莫不流涕。因号此山曰領巾麾之嶺也。乃作歌曰。

大伴佐提比古郎子、特り朝命を被り、使ひを藩國に奉はる。艤棹して言に帰き、
稍に蒼波に赴く。妾松浦〔佐用姫〕、この別れの易きことを嗟き、その会ひの難
きことを嘆く。即ち高き山の嶺に登り、遙かに離り去く船を望み、悵然に肝を断
ち、黯然に魂を銷す。遂に領巾を脱きて麾る。傍の者、涕を流さずといふことな
し。因りてこの山を号けて、領巾麾嶺と曰ふ。乃ち歌を作りて曰く
得保都必等 麻通良佐用比米 都麻胡非尔 比例布利之用利 於返流夜麻能奈
(万5. 871)

と₂ほつひ₁と₂ まつらさよ₁ひ₁め₁ つまご₁ひ₂に ひ₁れふりしよ₁り
おへ₁るやまの₂な

遠つ人 松浦佐用姫 夫恋に 領巾振りしより 負へる山の名
大伴宿禰旅人著 (?), 731年。

「ひ₁れ」が出てくる『万葉集』の歌は万2. 210, 万2. 213, 万3. 285, 万5. 868, 万5. 871, 万5. 872, 万5. 873, 万5. 874, 万5. 883, 万7. 1243, 万8. 1520, 万9. 1694, 万10. 2041, 万11. 2822, 万11. 2823, 万13. 3243, 万13. 3314である。全部で17回である。この内、約3分の1の例は『万葉集』の第5巻(5回)に出ている。

ここで注意すべきことは二つある。まず、後期の万葉集の歌には「ひ₁れ」は全く現れないという事。もう一つは、『万葉集』の第5巻で「ひ₁れ」を振った佐用姫をテーマにする歌は万5. 868—万5. 875であるが、この共通のテーマを提供した最初の歌は山上臣憶良の作である万5. 868である。山上臣憶良といえば、彼の

陸との関連は良く知られている。山上臣憶良自身は帰化人ではないと考えられるが、名前の「憶良」が示すように、少なくとも帰化人の家族の出身であるのは殆ど間違いないと思う。

「ひ₁れ」の大陸由来の歴史的、文献的な証拠

飛鳥と奈良時代には「ひ₁れ」はどのような材料で作られたかという情報はないが、平安時代には絹の薄織^{はくしよく}、またはあや織りの布で作られていた事が分かっている⁽¹⁵⁾。材料の絹の薄織^{はくしよく}は、「ひ₁れ」の大陸の由来を暗示しているのかもしれない。

「ひ₁れ」の韓国の由来

『古事記』に記録された天の日矛^{あめ ひほこ}の話によると、天の日矛^{あめ ひほこ}は「ひ₁れ」を新羅から日本に持ってきた。

又昔有新羅國主之子。名謂天之日矛。是人參渡來也。。。。故其天之日矛持渡來物者。玉津寶云。珠二貫。又振浪比禮。比禮二字以音效此。切浪比禮。振風比禮。切風比禮。又奥津鏡。邊津鏡。并八種也。此者伊豆志之八前大神也（記中：66 才，67 ウー68 才）

又、昔新羅の國の主の子有りき。名は天の日矛^{あめ ひほこ}と謂ひき。是の人は渡り参り來たること也。。。。故、其の天之日矛が持ち渡り來たる物は玉つ寶といひて、珠の二貫、又、浪を振る比禮、比禮の二字を音以ちて此れを效む^よ 風を振る比禮、浪を切る比禮、風を切る比禮、又、奥つ鏡、邊つ鏡、并せて八種也。此は伊豆志の八前大神也。

新羅の貴族の女性衣服の復元

新羅の貴族の女性の復元衣服を見ると、下の挿絵のように、その衣服にも「ひ₁れ」が付けられていた。（図 4）



図 4 新羅の貴族女性の復元衣服

（インターネットの

<http://www.lifeinkorea.com/culture/>

ccllothes/ccllothes.cfm より）

失敗に終わった大和の任那への遠征（562 年、欽明 23 年）とつながっている歌

新羅軍の將軍に殺されてしまった大和の將軍の伊企儺^{いきな}の妻であつた於譜磨故は捕虜にされた時、次の歌を歌った。

柯羅俱爾能 基能陪儺陀致底 於譜磨故幡 比例甫囉須母 耶魔等陸武岐底

(紀歌謠 100)

からくにの₂ き₂の₂へ₂にたちて おほばこ₁は ひ₁れふらすも₂ やまと₂
へ₁むき₁て

韓國の 城の上に立ちて 大葉子は ひれ振らすも 大和へ向きて

ここで注目しておきたいのは、上に引用した万 5. 868 と万 5. 871 と同じように、「ひ₁れ」を振った場所はいつも山または城のような高い所であつた。

高句麗と新羅の城、そして県の名前に現れる古代朝鮮語「比列」*pirayt

高句麗：比列忽（史記 XXXVII：5 ウ）⁽¹⁶⁾は漢文で「浅城郡」として注解している。

新羅：比列城（史記 III：10 ウ），比列州（史記 XXXV：9 ウ），比列忽（史記 II：13 ウ，VI：11 ウ，VII：19 オ，XXXII：2 ウ，XXXV：9 ウ）。漢文の注解は付いていない。

新羅の「比列城」とは高句麗の城のように「浅い城」であろうか、それとも「領巾の城」だろうか。領巾を振るのは儀式上、大切なことであつたので、後者の可能性も考慮に入れるべきだと思う。

「ひ₁れ」が大陸由来である事の言語学的な証拠

上代日本語で「れ」で終わる不派生な名詞はほとんど見られない。その例外はあれ「村」（万葉仮名の音韻表記がなく、中古の仮名表記しかない。）、くれ「黒木」、くれ「塊」、しぐれ「時雨」、うれ「末」、あられ「霞」、すみ₁れ「堇」、まれ「稀」、それとひ₁れ「領巾」だけである。

「れ」で終わる古代朝鮮語からの借用語

上代日本語 *mure* 「山」＜百済語 *mure* (ムレ)＞(紀 9：262)，(紀 19：92)，*mura*，*mora* (ムラ，モラ)(紀 15：412)「山」，中世朝鮮語 모・로 *móló* (龍歌 IV：21 ウ)，：ㅁㅂ： *moy* 「山」参照。

上代日本語 *kure* 「高句麗」⁽¹⁷⁾。

借用語ではないが、「れ」で終わる百済語 *nare* (ナレ)(紀 17：28)，(那禮)(紀

9 : 247)「川」も参照。

日琉諸言語の「ひ₁れ」の分布

「ひ₁れ」は上代日本中央語と中古語にしか現れない。もしこの言葉が純粋な日琉諸言語の言葉であったとすると、8世紀の倭文化に比べても非常に古風な琉球の「おもろさうし」の時代の文化に残っているだろうと考えて間違いないと思う。しかし、「ひ₁れ」の分布がかなり限られているので、借用語である可能性が高いと思う。

「領巾」の語源と日韓古代交流

また、上代日本語の超自然能力を持っている「ひ₁れ」が朝鮮半島から輸入されたことは間違いないと思うが、「ひ₁れ」の語源は明らかではない。ここで、上に挙げた古代朝鮮半島の地名に出る「比列」をもう一度考え直そう。前にも説明したように、新羅の「比列」は高句麗語の比列のように、「浅い」である可能性もあり、「領巾」にも関係がある可能性がある。そして、それらの二つを合わせる可能性もあると思う。「領巾」は勿論「平たい」物である。「浅い」と「平たい」との違いは著しくはない。たとえば、「平鍋」と「平^{ひらなべ}たい皿」参照。「平」と「領巾」のアクセントも同じ2.1の高高式である。しかし、私が知っているかぎりでは、中世朝鮮語にも現代朝鮮語にも「平」、「浅い」または「領巾」を意味する*pirə, *pire, *piraという言葉は存在しない。しかし、高句麗の地名には比列「浅い」が出てくる事は確かである。なぜだろう。この理由は、高句麗の地名の大部分は実際韓系の高句麗語ではなく、日琉系の基礎語を反映している事にある。新羅の地名は高句麗地名のように細かく研究されていないが、新羅の領土には少なくとも6世紀の終わりまで日琉系の言語が存在していた⁽¹⁸⁾。だから、新羅の地名の中にも、日琉系の言語の要素が存在しても不思議ではない。では、高句麗と新羅の地名に現れる比列(「浅い」、「平」?)は部分的に日琉系の言語*pira「平」の借用語であったと考えるとどうだろう。その*piraに韓系の派生名詞接尾語*-iと属格接尾語*-ci⁽¹⁹⁾を加えて、最初*pira-i-ciに成ってから、2番目と3番目の音節の母音の省略で古代朝鮮語の比列*pirəy-tに変化して、その比列*pirəy-tは当然音節末子音のない上代日本語には/pire/「領巾」として借用されたというわけである。

最後に言及しておきたいのは、山上臣憶良の万5. 868に出る「ひ₁れ」の綴り方は古代朝鮮語と同じ「比列」である。それは偶然であるかもしれないが、「比列」の綴り方は万葉集中に5. 868にしか出てこない。そして、これはただの偶然ではなく、著しい類似性だと思う。

つまり、「領巾」は古代日韓交流の複雑性を示していると思う。物体としての「領巾」は上代日本語に古代朝鮮語から借用されたが、その語源はやはり古代朝鮮半島に存在した日琉系の言語に基づいているのである。

注

- (1)国際日本文化研究センターの平成 20 年 3 月 15 日の王維坤先生の共同研究会の発表の時、私の色々な間違いに注目させて下さった宇野隆夫先生、王維坤先生、関清先生、川崎保先生に心から感謝を申し上げる。この先生方のコメントによって、論文を書き直した。
- (2)『古事記』からの引用は『古事記大成』版による。
- (3)『日本書紀』と『日本書紀歌謠』からの引用は『新訂増補国史大系』版による。
- (4)『先代旧事本紀』からの引用は大野七三の『先代旧事本紀訓註』による。
- (5)澤潟 1967, p.901。
- (6)森博達 1991, p.225 の音仮名の「ム」のリストには「茂」の漢字は出ていない。
- (7)澤潟 1967, p.276。
- (8)高句麗は、句麗に付けられた接頭語「高」を含める形である。
- (9)馬淵 2000, pp.421-430。
- (10)Vovin 2005, pp.75-76。
- (11)澤潟 1967, p.338。
- (12)『漢語大詞典』11 巻, p.1210。
- (13)Stachowski 2004。
- (14)『万葉集』からの引用は『日本古典文学大系』による。
- (15)室伏 1979, p.78。
- (16)『三国史記』からの引用は宋基中 2004 による。
- (17)馬淵 2000, pp.421-430。
- (18)Vovin 2007。
- (19)古代朝鮮語の「叱」*-ci-属格接尾語を参照。

資料略称

(日本文献)

記	古事記 712 年
紀	日本書紀 720 年
紀歌謠	日本書紀歌謠 720 年
先代	先代旧事本紀 7 世紀 (?)
万	万葉集 759 年以後

(韓国文献)

史記 삼국사기 三国史記1147年
龍歌 용비어천가 龍飛御天歌1443年

参考文献：

大野七三編 1989『先代旧事本紀訓註』東京：批評社。

澤潟久孝（代表）1967『時代別国語大辞典 上代編』東京：三省堂。

『漢語大詞典』1993，11卷，上海：漢語大詞典出版社。

黑板勝美編 1966-67『日本書紀』『新訂増補国史大系第1 上・下巻』東京：吉川弘文館。

高木市之助・五味智英・大野晋（校注）1957-1962『万葉集』1－4巻，『日本古典文学大系』4－7巻，東京：岩波書店。

高木市之助・富山民蔵（編）1974『古事記大成7巻（古事記総索引本文篇）』『古事記大成8巻（古事記総索引索引篇）』東京：平凡社。

馬淵和夫 1999『古代日本語の姿』東京：武蔵野書院。

室伏信助ほか編 1978『有職故実日本の古典』東京：角川書店。

森博達 1991『古代の音韻と日本書紀の成立』東京：大修館書店。

宋基中 2004『古代国語語彙表記漢字의 字別用例研究』서울：서울대학교출판부。

Stachowski, Marek 2004. 'The Origin of the European Word for Sabre.' *Studia Etymologica Cracoviensia*, vol. 9: pp.133-41.

Vovin, Alexander 2005. 'The End of the Altaic Controversy,' a review article of Sergei Starostin, Anna Dybo, and Oleg Mudrak's Etymological dictionary of the Altaic Languages. Leiden: Brill (2003), *Central Asiatic Journal* 49.1: pp.71-132.

Vovin, Alexander 2007. 'Cin-Han and Silla words in Chinese transcription.' In: *Linguistic Promenades: Festschrift for Prof. Kim Chin-Wu on the occasion of his retirement*. Ed. by Lee, Sang-oak. Seoul: Hallim, 2007.